

各国プロサッカーリーグにおけるホームゲームと アウェーゲームの勝率, 得失点差の違い

Differences of win-loss ratio and goal-difference
in home and away professional soccer league system.

森 恭*・乗原 公*
Yasushi MORI*・Isao KUWAHARA*

キーワード：サッカー ホーム&アウェイ 勝率 サポーター ストレス

我が国にもプロフェッショナル・サッカーリーグであるJリーグが発足して、2000年で8年目のシーズンとなる。その間に2度のワールドカップがあり、1993年にはあと1歩のところまで予選通過を逃したものの、1997年には見事にアジア予選を通過して翌1998年にフランスで開催されたワールドカップ本大会に出場した。また、若年層においては、オリンピック(23歳以下でチーム編成)、ワールドユース、ワールドジュニアユース等への代表チームの参加、活躍も見逃せないことがらである。

当初10チームでスタートしたJリーグも2000年には2部制合計28チームから構成されるようになり、この数は今後さらに増える傾向にある。

このような流れの中で、日本におけるサッカーが文化としてどのくらい根付いているといえるであろうか。このことについて、今回はリーグにおけるホームゲームとアウェーゲームの戦いぶりから考察を試みることにする。

ところで、サッカーの競技はどのような形態で行われているであろうか。

サッカー競技における大会の開催形態

サッカー競技では各種の大会はおよそ以下のよう

な形態で開催される。

- 各国代表レベルの国際大会(ワールドカップ, 欧州選手権, アジア大会など)
集合形式(どこかの国, 地域などに集まって行う)
リーグ戦とトーナメントの併用が多い
例)大会の中での予選リーグと決勝トーナメント
- 各国代表レベルの国際大会の大陸別予選
集合形式またはホーム&アウェー(後述)でのリーグ戦+オプション
- 単独チーム間の国際試合
例)欧州チャンピオンズリーグ(欧州各国リーグの前年上位チームによる大会)
決勝以外はホーム&アウェー
リーグ戦とトーナメントとの併用
例)UEFAカップ(欧州各国カップ戦の勝者とリーグの前年上位チームによる大会)
ホーム&アウェー
トーナメント
- 国内大会
 - ・リーグ 1年のうちの大半をかけてチャンピオンを決める
ホーム&アウェー
 - ・トーナメント(カップ戦) 比較的短い期間または少ない試合数でチャンピオンを決める

2000. 6.30 受理

*新潟大学教育人間科学部

リーグ戦の特徴

- 同じディビジョン（区分わけ）のチームで総当たり
→ひと回り：1回戦総当たり ふた回り：2回戦総当たり
- 勝点制による順位決定
→勝3点、引分1点、負0点の勝点制が確立されている

順位は勝点の多いチームを上位、同位であれば得失点差の多いチーム、さらに同位であれば総得点の多いチーム、ここまででも同位であれば当該チーム同士の対戦結果から決定される

- 試合数が多くなる
→多くの国で18から20チーム2回戦で34試合×18チームから38試合×20チーム、Jリーグは16チーム2回戦で30試合×16チーム
- 番狂わせの順位への影響が少なくなる
→実力に即した順位となることが多い
→各国でのサッカー競技のメイン大会や国際大会の大陸別予選のやり方にふさわしい
- 原則としてホーム&アウェー方式を採用
2回戦総当たりで同じ相手チームと、ホームゲームで1回とアウェーゲームで1回対戦するやり方
ホームゲーム：自チームの本拠地（ホームタウン）での試合もしくは自チームが管轄する試合（欧州や南米では後者はまれ）
アウェーゲーム：相手チームのホームゲーム

カップ戦の特徴

- トーナメント方式がほとんどであり、以下ではトーナメント方式の特徴について述べる。
- 勝者が次の回戦に進むことができる
引分の場合、次回戦進出チームを決定するために延長戦あるいはペナルティキック方式での決定がおこなわれる。
- 単純なトーナメント方式であれば総試合数は参加チーム数-1で足りる
- 番狂わせで順位をあげることがしばしばある。
→イングランドのFAカップでは1部（他の国での2部）リーグのチームが準決勝、決勝に進出することがしばしば起こっているし、1999-2000年のフランスカップではアマチュアチームが堂々と決勝進出を果たしている。
- 必ず最後の試合でチャンピオンが決まる
→リーグとは異なった趣がチーム、選手にとつ

ても、観客にとってもある。

- 1回戦の場合と2回戦の場合があり、後者の場合やはりホーム&アウェー方式が採用される。尚2回戦を行う場合でも、決勝戦のみは1回戦で行われることが多い。

なぜホーム&アウェー方式なのか

1. チームとホームタウンとの結びつきが強い
多くのプロチームを運営しているクラブは、もともとがその町、地域の人々によって設立、運営されてきた歴史を持っている。つまり、その町、地域の人々はおらがチームとして自身の町や地域のチームに愛着を持ち、応援、サポートすることになる。

→イングランド・プレミアリーグのもとになったイングランドリーグは1888年開始、イタリア・セリエAは1898年開始である

→熱烈な応援の有無、試合会場へのアクセスの便、遠征に伴う移動・宿泊等のストレスの有無、会場への慣れなどから考えてホームチームが有利であると言われている（松田，1979；湯浅，1997）。このことはホームアドバンテージと呼ばれている。

→実際にドイツ・ブンデスリーグ33年間でホームチームの勝率がアウェーゲームの勝率を大幅に上回っていることが報告されている（湯浅，1997）。

→公平を期すために、ホームとアウェーで一度ずつ戦う

2. 興業収益の公平化

ホームゲームの運営はホームチームが行い、経済的な収支についてもホームチームの管轄となる。ホーム&アウェー方式によれば、同一リーグ等内のすべてのチームとの対戦をすべてのチームが運営することになり、収益の公平化が図れる。

Jリーグ（1部）の開催ならびに順位決定の方法

我が国のプロサッカーリーグは1993年に発足、開幕した。当初からのリーグ形態をたどると、以下のようになる（佐山，1994；川淵，1999）。

1993	10チーム
前期	2回戦総当たり（ホーム&アウェー）
後期	〃
	勝点制なし、延長・ペナルティキックまで行って勝者を決め勝数の多いチームが上位

1994	12チーム	同上
------	-------	----

1995 14チーム

前期 2回戦総当たり (ホーム&アウェー)

後期 //

勝点制の導入, 勝3点, PK負1点

勝点の多いチームが上位

1996 16チーム

一期制 2回戦総当たり (ホーム&アウェー)

勝点制, 勝3点, PK負1点

勝点の多いチームが上位

1997 17チーム

前期 1回戦総当たり

(ホーム&アウェーのうちどちらか)

後期 //

(前期とは逆の開催地で行う)

勝点制の変更, 勝3点, 延長勝2点, PK勝1点

勝点の多いチームが上位

1998 18チーム 同上

次年度2部制導入に向けて参入・残留戦が行われる

1999 16チーム 同上

Jリーグ2部制の導入

勝点制の変更, 引分の導入

勝3点, 延長勝2点, 引分1点

勝点の多いチームが上位

Jリーグの開催ならびに順位決定の方法の特殊性

以上をまとめると、これまでに行われてきたJリーグの開催ならびに順位決定の方法は世界各国のリーグの方式と比べた場合にいくつかの特殊性を持つことがわかる。

1. 前後期の二期制を採用していること。

この背後には、リーグ参加チーム間の競技力の格差によって生じるリーグの緊迫感の欠如への対応の意図が推測される。

もっとも、このような競技力の格差が存在すること自体がJリーグの特徴であるとも考えられる。

2. 上記に加えて、1997年度以降前後期のそれぞれで1回戦総当たりが行われ、両期を合せてホーム&アウェーが満たされる形となっていること。この

ことは、同じ相手と先にアウェーで対戦する際に、「今回は我慢して次回ホームゲームで勝とう」などといった計算がなりたたず、少ない試合数のため試合がどこで行われようとも、短期決戦的にとにかく勝利のみを目指す傾向に拍車がかかることが予想される。

3. リーグ戦でありながら、延長戦、場合によってはペナルティキック方式による勝者の決定までがおこなわれていたこと。

このことにより各チームはどんな場合にも勝利を目指すことを要求され、ホームとアウェーで戦い方を変え、順位をあげるための星勘定をして試合に臨むことが少なくなったことが予想される。

以上をふまえ、本研究では以下の点を目的とする。

1. 競技のレベル、サッカーを取り巻く環境、人々のサッカーへの関心などのいわゆるサッカー文化の面から、サッカーの先進国といわれている欧州各国のプロサッカーリーグ、ならびにJリーグにおいて、ホームアドバンテージがどのくらい存在するか。

2. ホームアドバンテージの点から、Jリーグはどのような特徴を持ったリーグといえるか。

これらについてホームゲーム、アウェーゲームそれぞれの勝率、得点、失点などの状況から考察する。

方法

調査対象

- ・1999年から2000年にかけてのイタリアリーグ (セリエA)
- ・同 イングランドリーグ (プレミアリーグ)
- ・同 ドイツリーグ (ブンデスリーグ)
- ・同 スペインリーグ
- ・同 フランスリーグ
- ・1999年Jリーグ

調査内容

ホームゲーム、アウェーゲームそれぞれにおける試合数、勝ち数、引分数、得点数、失点数、得失点差。尚、Jリーグにおいては、延長戦での勝利は引分としてカウントした。

調査方法

各リーグに関するホームページ、サッカー雑誌等の関連記事より上記の内容について調査した。

結果と考察

各国リーグの試合数、勝ち数、引分数、勝率、勝点獲得率、得点数、失点数、得失点差を最終順位ランクごとに平均し、ホームゲームとアウェーゲームに分けて示したものが表1である。

1. ホームゲームとアウェーゲームにおける勝率
各チームごとにホームゲームとアウェーゲームそれぞれにおいて、勝利数を試合数で除しこれを勝率とした。また勝利数に引分数を加えたものを試合数で除し、これを勝点を得た試合の割合として勝点獲得率とした。

各リーグごとの勝率ならびに勝点獲得率を示したものが図1である。

ホーム-アウェー×リーグの2要因分散分析の結果、勝率についてはホーム-アウェーで1%水準で主効果が見られ ($F(1/104) = 253.497$)、ホーム-アウェーとリーグの交互作用が5%水準で有意であった ($F(5/104) = 4.288$)。また勝点獲得率についても同様に、ホーム-アウェーに1%水準で主効果が見られ ($F(1/104) = 235.555$)、ホーム-アウェーとリーグの交互作用が5%水準で有意であった ($F(5/104) = 3.983$)。勝率、勝点獲得率のいずれもホ-

ムゲームにおいて高く、各国リーグを通して見ればアウェーゲームに比べてホームゲームで多くの勝利をおさめ、多くの勝点を挙げていることがわかる。いわゆるホームアドバンテージは確かに存在すると言えよう。これはドイツ・ブンデスリーグの33年間にわたる記録とも一致する(湯浅, 1997)。また、いずれの場合も交互作用が有意であった。ホームアドバンテージは各国リーグを平均してみれば確かに存在するが、いずれのリーグにも同じように存在するのではない可能性もありそうである。そこで、ホームゲーム、アウェーゲームそれぞれについて、各国リーグによる違い(単純主効果)が見られるかどうかを1要因分散分析で検討した。

その結果、ホームゲームにおいては、勝率ではリーグの主効果がなく ($F(5/104) < 1.0$)、勝点獲得率では5%水準で有意な主効果がみられた ($F(5/104) = 2.514$)。FisherのPLSDによる多重比較では、Jリーグ以外の各国リーグ間での差異は有意なものではなく、プレミアリーグ以外の各国リーグとJリーグとの間に5%水準で有意な差異が認められ、いずれもJリーグの勝点獲得率が低かった。また、すべてのリーグの中でJリーグの勝点獲得率がもっとも低いものであった。

アウェーゲームにおいては、勝率でリーグ間の違いが有意傾向を示した ($F(5/104) = 2.094, p < .08$)。多重比較の結果、JリーグとセリエA・スペインリーグ・フランスリーグの間有意差がみられ、Jリーグ以外の各国リーグ間には有意差はなく、全体の中でJリーグの勝率ももっとも高いものであった。こ

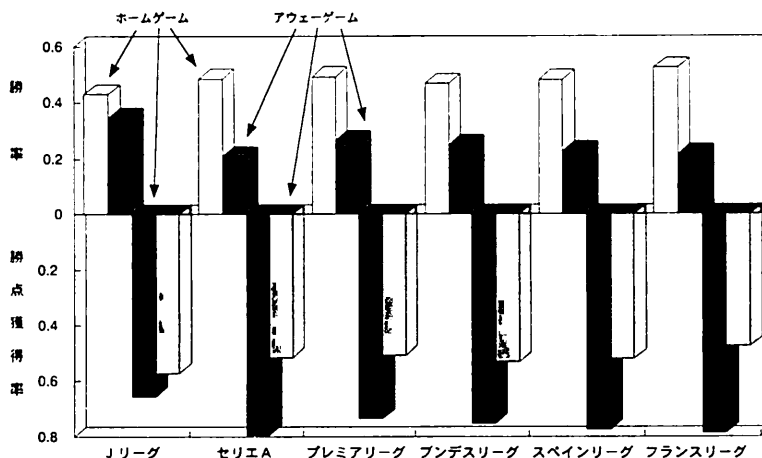


図1 各国リーグの平均勝率と平均勝点獲得率

のようなアウェーゲームでの勝率の高さは、リーグ全体としてみれば、ホームゲームでの勝点獲得率を下げることに繋がると言えよう。アウェーゲームでの勝点獲得率にはリーグの主効果はみられなかった ($F(5/104) < 1.0$)。

さらにホーム-アウェーの戦績を検討するために、勝率、勝点獲得率ともにホームゲームの値からアウェーゲームの値を引いたものを算出し、リーグの主効果を検討した(図2)。この結果、いずれにおいてもリーグの主効果がみられ、多重比較の結果、Jリーグと他の各国リーグとの間のみで有意差がみられ、各国リーグ間に有意差はみられなかった。各国リーグの値が0.22から0.31の間にあるのに対して、Jリーグの場合には0.08と明らかに値がもっとも低い。このことから、Jリーグにおいては勝率と勝点獲得率でみる限りホームアドバンテージはほとんど存在しないことが伺える。

勝率に関して言えば、ホームゲームにおいては違いがみられないものの、アウェーゲームの勝率がJリーグで高い。また勝点獲得率については、ホームゲームでJリーグの値の低さがみられ、アウェーゲームでは違いがみられなかった。

このような結果から、欧州の各国リーグでは相手が引き分けもしくは僅差での勝利を狙ってくるホームゲームにおいて、引き分けに持ち込まれた試合を差し引いてもJリーグでの勝率と同等の勝率を挙げていることになる。つまり、ホームゲームにおいてはひたすら攻撃的に試合を進め、勝利を目指している様子がうかがえる。このことは裏を返せば、アウェー

ゲームではなんとか引き分けによって勝点を獲得はしているものの、勝利を挙げるのが困難であることを示している。このような現象こそがまさにホームアドバンテージと呼ばれるものであるが、このことは実力発揮の度合いの差であるのか、戦い方の変更によるものなのであろうか、さらに検討が必要である。

これに対してJリーグの場合には、アウェーゲームでの勝利が比較的多く、ホームで勝点を得られないこと、すなわち敗北が比較的多いことがわかった。このようなホームアドバンテージのなさの原因はどんなことにあるのであろうか。

2. ホームゲームとアウェーゲームにおける1試合あたり得失点差、得点、失点

ホームゲームおよびアウェーゲームそれぞれの1試合あたりの得失点差を各国リーグごとに示したものが図3である。

まず得失点差に関するホーム-アウェー×リーグの2要因分散分析の結果、ホーム-アウェーの主効果 ($F(1/104) = 51.636, p < .01$) と交互作用 ($F(1/104) = 1.250, p < .01$) がみられた。これらのことからホームゲームでの得失点差が大きいものの、リーグによってその様子が異なることが考えられる。

交互作用がみられたために、リーグごとにホーム-アウェーの得失点差を対応のあるt検定で検討したところ、Jリーグのみにおいて有意差がみられなかった ($t(15) = 1.036, p > .3$)。また、ホームゲー

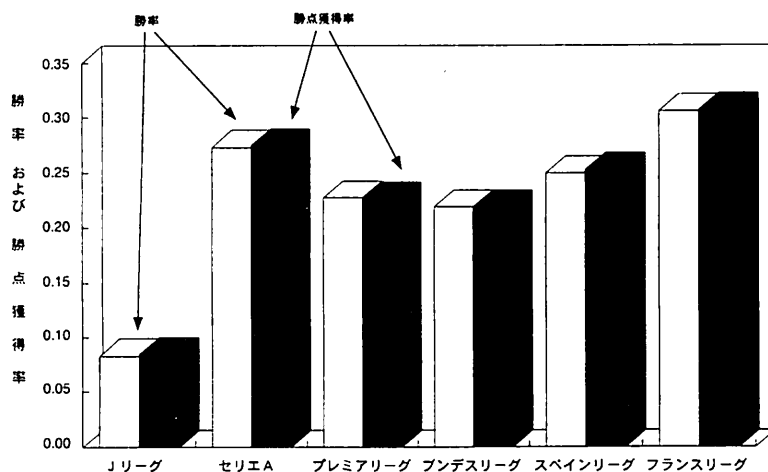


図2 各国リーグのホームゲームとアウェーゲームの勝率ならびに勝点獲得率の差

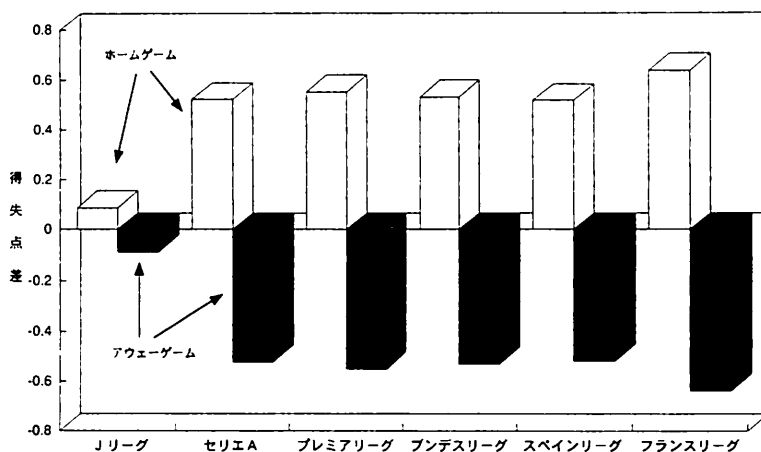


図3 各国リーグにおけるホームゲーム，アウェーゲーム1試合あたりの得失点差

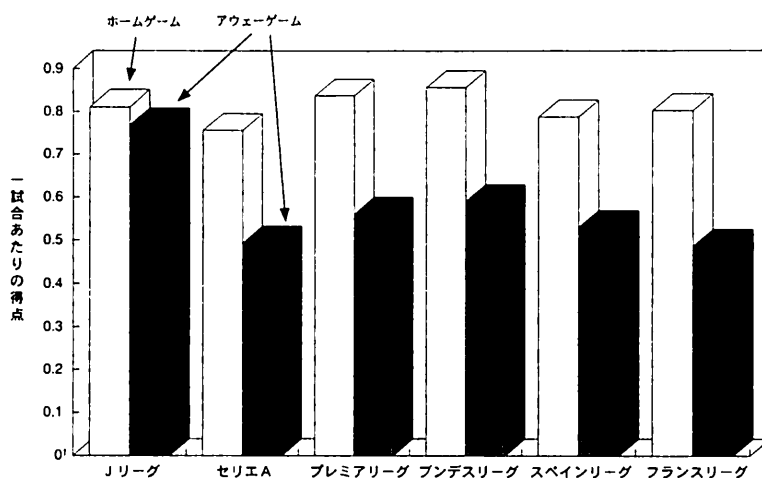


図4 各国リーグの1試合あたりの得点

※ ホームゲームの失点の平均値，アウェーゲームの失点の平均値はそれぞれアウェーゲームの得点の平均値，ホームゲームの得点の平均値の符号を変えたものに相当する

ム，アウェーゲームそれぞれ別々にリーグの主効果をみたところ，いずれの場合も有意な主効果はみられなかった。しかし，付加的な情報を得るために多重比較を行ったところ，Jリーグと他のリーグとの間にのみ有意差がみられた。ホームゲームの場合の平均値はJリーグでは0.04であるのに対して他のリーグでは0.26から0.32となり差異は小さいもののJリーグ以外のリーグとJリーグとは異なっているようにみえる。尚アウェーゲームにおいては，これらの符号を逆にしたものが平均値となる。

また，得点および失点についてホーム－アウェー×リーグの2要因分散分析を行った結果，リーグの主効果 ($F(5/104) = 2.29, p = .05$)，ホーム－アウェーの主効果 ($F(1/104) = 167.40, p < .01$)，交互作用 ($f(5/104) = 4.05, p < .01$) がみとめられた (図4)。また，失点についてもリーグの主効果 ($F(5/104) = 3.12, p < .05$)，ホーム－アウェーの主効果 ($F(1/104) = 118.71, p < .01$)，交互作用 ($f(5/104) = 2.88, p < .02$) がみられた。図4にもみられるように，Jリーグではホームゲーム，アウェー

ゲームともに同等の得点を挙げているが他のリーグではアウェーゲームでの得点が少なくなっている。このことは、逆に他のリーグではホームゲームでの失点が少ないことも意味している。

つまり、欧州各国のリーグにおいては、アウェーゲームでの得点の少なさはアウェーゲームでは攻撃よりも守備のウェイトを重くして戦っていることを示し、ホームゲームでの失点の少なさはホームチームが試合を有利にすすめている様子を示していると考えられよう。守備的ではなくとも失点が少ないことは、相手を圧倒していると考えられるからである。これとは対照的にJリーグにおいては、ホームゲームもアウェーゲームもほぼ同じように戦っていることとともに、欧州各国リーグにあるようなホームゲームの有利さ、あるいはアウェーゲームの難しさをチーム、選手、スタッフなどが感じていないと考えられる。

戦い方という面では、Jリーグの2期制によってわずかに15試合で前期または後期のチャンピオンが決まることに加えて、同一の相手とは前期もしくは後期にホームゲームは一度しかできないことから、選手・チームは試合ではとにかく勝利を目指し、まるでトーナメントのように短期決戦をしなければならない事態になっていると言えよう。

ホームゲームの有利さという面からは、会場への慣れ、遠征に伴うストレスなどの点でホームゲームが有利なことはどのリーグであっても同様であると考えられる。従って、Jリーグと他のリーグとのホーム&アウェーの戦績の様相が違うことの源はこれらとは別のところにあると言えよう。このことについては、サポーターの存在をあげる場合が多く、チーム、選手、スタッフに対して後押しとなるような応援・サポート、そしてこれらによる選手たちの精神的な昂揚である可能性が高いといえよう。

たとえば、観客動因数についてみると、セリエA 1999-2000シーズンでは1試合平均3万人程度であるのに対して、Jリーグ2000前期では1試合平均1万人程度、節によっては1試合平均6,500人程度という時もあった。

また、欧州諸国のサッカー競技場はサッカー専用であることが多く、日本にみられるような陸上競技場との併用はあまり多くない。このことは観客と選手との距離を縮め、良きにつけ悪きにつけ、観客からの影響が強まることにつながる。また、欧州各国の観客の行動の大胆さ、荒々しさは日本の比ではないことが、TVの衛生中継などからも伺い知ること

ができ、観客の影響は我々の想像以上のものがあるであろう。

そして、このような観客の大多数を味方にして戦うのか、敵にして戦うのか。選手は試合の勝敗や怪我への不安など多くのストレスを抱えて試合に臨むが、ホームチームの選手には観客の大多数はまさにソーシャルサポートを与えるサポーターであり、アウェーチームにとっては観客の大多数がブーイングややじでストレスを助長する存在となるわけである。

さらに、ホームゲームがホームタウン、すなわちチームの本拠があり、練習場などの選手にとって日常的な活動の場で試合が行われることは、単に慣れている以上に、試合に向けて徐々にたかまるストレスを家族や親しい人々の中で癒されながら試合を迎えることを可能にする。これこそがまさにソーシャルサポート（島，1997）であり、人々の生活にサッカーが根付いている、あるいはサッカー文化の定着している（湯浅，1997）ところでならでのサポーターの大きな存在価値ではないであろうか。さまざまな形のソーシャルサポートが競技選手のメンタルヘルスに効果があり（土屋，1995）、バーナウトを抑制することができ（土屋・中込，1994）、チームビルディングにも生かすべきであることが言われている（土屋・中込，1996）。今後、観客の選手・チームに対する影響をソーシャルサポートの観点から考えることも可能であろう。

また、著名なサッカー指導者であるアーセン・ベンゲルは、選手のすばらしいプレーが観客をスタジアムへと導き、熱狂させ、このことがまた、選手のプレーを引き出す効果について述べている（1997）。おそらく、欧州の選手はこのことがわかっているために特にホームゲームでのパフォーマンスを重要視することは十分に考えられることである。

3. 各国リーグの順位ランクごとのホームゲームとアウェーゲームにおける違い

ホームゲームとアウェーゲームの勝率差ならびに勝点獲得率差、ホームゲーム1試合ごとの得失点差、アウェーゲーム1試合ごとの得失点差についてリーグ×最終順位ランク（上位、中位、下位）の2要因分散分析を行った。

勝率差についてはリーグの主効果（ $F(5/92) = 4.44, p < .01$ ）がみられ、勝点獲得率差についてはリーグの主効果（ $F(5/92) = 4.69, p < .01$ ）と順位（ $F(2/92) = 4.30, p < .02$ ）の主効果がみられた。つまり、全体でみるとホームゲームとアウェーゲー

表1 各国リーグについての調査内容の平均値

リーグ名	試合数	ホームゲーム							アウェーゲーム						
		勝数	引分数	勝率	獲得率	得点	失点	得失差	勝数	引分数	勝率	獲得率	得点	失点	得失差
Jリーグ(19)		6.436	3.375	0.429	0.654	0.810	0.767	0.043	5.188	3.376	0.345	0.569	0.766	0.810	-0.044
上位(5)	30	8.400	2.400	0.558	0.720	0.993	0.647	0.346	8.000	2.800	0.532	0.720	0.953	0.673	0.280
中位(6)	30	7.330	4.000	0.488	0.756	0.811	0.617	0.194	4.500	3.670	0.298	0.540	0.722	0.806	-0.084
下位(5)	30	3.400	3.600	0.228	0.467	0.627	1.067	-0.440	3.200	3.600	0.214	0.453	0.633	0.953	-0.320
セリエA(19)		8.223	5.223	0.483	0.791	0.755	0.493	0.262	3.553	5.223	0.210	0.516	0.493	0.755	-0.262
上位(6)	34	11.170	4.170	0.657	0.902	1.044	0.426	0.618	6.330	5.670	0.327	0.706	0.632	0.554	0.078
中位(6)	34	8.000	5.170	0.470	0.775	0.711	0.534	0.177	3.000	6.170	0.178	0.539	0.475	0.745	-0.270
下位(6)	34	5.500	6.330	0.323	0.696	0.510	0.520	-0.010	1.330	3.830	0.080	0.304	0.373	0.966	-0.593
プレミアリーグ(20)		9.351	4.600	0.494	0.734	0.835	0.559	0.276	5.049	4.600	0.266	0.508	0.559	0.835	-0.276
上位(6)	38	12.000	4.330	0.632	0.860	0.947	0.386	0.561	8.500	4.670	0.447	0.693	0.711	0.623	0.088
中位(7)	38	9.430	5.140	0.499	0.767	0.872	0.590	0.282	5.140	4.710	0.271	0.519	0.590	0.793	-0.203
下位(7)	38	7.000	4.290	0.370	0.594	0.703	0.677	0.026	2.000	4.430	0.106	0.338	0.398	1.060	-0.662
ブンデスリーグ(19)		7.943	4.833	0.468	0.752	0.856	0.590	0.266	4.220	4.833	0.250	0.533	0.590	0.856	-0.266
上位(6)	34	10.500	4.000	0.618	0.853	1.083	0.525	0.558	6.330	5.170	0.372	0.676	0.672	0.730	-0.058
中位(6)	34	8.000	4.000	0.472	0.706	0.804	0.608	0.196	4.000	4.830	0.237	0.520	0.583	0.770	-0.187
下位(6)	34	5.330	6.500	0.315	0.696	0.681	0.637	0.044	2.330	4.500	0.140	0.402	0.515	1.069	-0.554
スペインリーグ(20)		9.107	5.602	0.478	0.774	0.787	0.527	0.260	4.303	5.603	0.228	0.521	0.528	0.787	-0.260
上位(6)	38	11.830	3.670	0.622	0.816	0.961	0.504	0.457	6.000	6.670	0.317	0.667	0.592	0.610	-0.018
中位(7)	38	9.000	5.290	0.474	0.752	0.763	0.541	0.222	4.290	5.430	0.226	0.511	0.504	0.737	-0.233
下位(7)	38	6.880	7.570	0.359	0.759	0.662	0.534	0.128	2.860	4.860	0.153	0.406	0.496	0.989	-0.493
フランスリーグ(19)		8.887	4.447	0.523	0.784	0.802	0.483	0.319	3.667	4.443	0.217	0.477	0.483	0.802	-0.319
上位(6)	34	10.500	4.000	0.618	0.853	0.858	0.436	0.422	5.170	4.000	0.303	0.539	0.637	0.765	-0.128
中位(6)	34	8.830	4.670	0.520	0.794	0.824	0.485	0.339	3.000	5.330	0.178	0.490	0.377	0.740	-0.363
下位(6)	34	7.330	4.670	0.432	0.706	0.725	0.529	0.196	2.830	4.000	0.170	0.402	0.436	0.902	-0.466

※()内はチーム数を表す。

試合数は1シーズンの試合数でホームゲームとアウェーゲームを同数含む。

標準偏差は省略した。

ムの勝率差は順位によって異なっているとは言えず, 勝点獲得率差は下位ほどホームゲームでの勝点獲得率が相対的に高くなるようである。

勝率差, 勝点獲得率差を各国リーグ別に順位の主効果をみてみると, 勝率差についてはJリーグのみで主効果に有意傾向があった ($F(2/13) = 3.46, p < .07$)。また勝点獲得率差についての順位の主効果はJリーグで有意傾向 ($F(2/13) = 3.18, p < .08$), セリエAで有意 ($F(2/15) = 4.80, p < .05$), スペインリーグで有意傾向 ($F(2/17) = 2.94, p < .10$) がみられ, セリエAとスペインリーグについては下位ほど高くなっており, これはこの2つのリーグではホームゲームに比べて, アウェーゲームで勝点を挙げられないことによるものであろう (表1)。プレミアリーグ, ブンデスリーグ, フランスリーグともにはほぼ横違い。つまり, これらのリーグでは強いチームはアウェーゲームでもそれなりに強さを発揮し, 弱いチームはホームゲームでも弱いということが伺える。Jリーグについてのみ, 勝率, 勝点獲得率ともに中位でもっとも差が大きくなった。このことについて表1のホームゲームならびにアウェーゲームでの勝率, 勝点獲得率をみてみると, Jリーグ上位ではアウェーゲームでも勝率, 勝点獲得率の数値が大きいため差が小さくなり, Jリーグ下位ではホームゲームでの数値が低いためやはり差が小さくとなると考えられる。

次に1試合あたりのホームゲーム, アウェーゲームそれぞれの得失点差についてリーグ×順位の2要

因分散分析を行った。この結果, リーグの主効果 ($F(5/92) = 3.913, p < .01$), 順位の主効果 ($F(2/92) = 50.660, P < .01$), 交互作用 ($F(10/92) = 2.097, p < .05$) がみられた。それぞれの要因に関して多重比較したところ, Jリーグが他のリーグより低く, 上位>中位>下位の順であった。また全体の傾向の中で, Jリーグ下位が特に低い値を示している。アウェーゲームにおける1試合あたりの得失点差については, リーグの主効果 ($F(5/92) = 4.073, p < .01$), 順位の主効果 ($F(2/92) = 72.960, P < .01$) がみられ, Jリーグが他のリーグより高く, 上位>中位>下位の順であった。交互作用はみられなかった。ここでの結果もJリーグ下位チームのホームゲームでの弱さを示しているといえよう。

まとめ

1. 欧州各国のプロサッカーリーグならびにJリーグの戦績を分析することで, 欧州各国リーグにおいてホームチームの有利さ (ホームアドバンテージ) が存在することが確認された。
2. Jリーグにおいてはホームアドバンテージと呼べるほどの戦績の偏りは見出せなかった。
3. Jリーグの戦績の特殊性としては, アウェーゲームでの勝率の高さ, 得失点差の大きさの2点が指摘された。

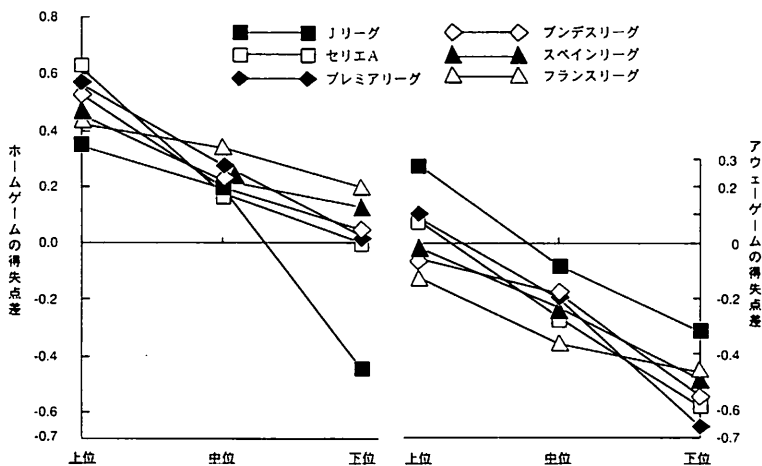


図5 各国リーグの最終順位ごとの得失点差の違い

4. 特にリーグ参加チームを最終順位によって、上位、中位、下位と分けた場合に、Jリーグでは上位と下位において特にホームゲームとアウェーゲームの戦績に差がなくなるようである。上位はホームでの戦績はもちろん高く、これにアウェーゲームでも高い戦績を挙げることでホームゲームとアウェーゲームの戦績の差がなくなる。これに対して、下位ではホームゲームの戦績が他の順位、あるいは他リーグのチームに比べてかなり低くなることで、アウェーゲームとの戦績の差がなくなるようである。

5. これらについて、Jリーグの開催形態の特殊性と勝利への志向性との関連、ならびにサッカー文化の定着・成熟のあらわれとしての一般の人々のサッカーへの興味・関心がホームチームとアウェーチーム及ぼす異なった影響について検討した。

引用・参考文献

アーセン・ベンゲル (岡田 紀子 訳) (1997)
「勝者のエスプリ」NHK出版

川淵 三郎 (1999) 「J.LEAGUE YEABOOK
1999」日本プロサッカーリーグ

松田 岩男 (1979) 「スポーツと競技の心理」大修館書店

佐山 一郎 (1994) 「Jリーグよ！サッカーめざめの年にー」主婦の友社

島 悟 (1997) 「ストレスとこころの健康」ナカニシヤ出版

徳永 幹雄 (1996) 「ベストプレーのメンタルトレーニング」大修館書店

土屋 裕睦 (1995) 「ソーシャル・サポートが大学運動選手の精神的健康に及ぼす影響」日本心理学会第59回大会発表論文集 臨床・障害 1, 211

土屋 裕睦, 中込 四郎 (1994) 「ソーシャル・サポートのバーナウト抑制効果の検討」スポーツ心理学研究 21, 23-31

土屋 裕睦, 中込 四郎 (1996) 「ソーシャル・サポートの活性化をねらいとしたチームビルディングの試み」スポーツ心理学研究 23, 35-47

湯浅 健二 (1997) 「サッカー劇場へようこそ」日刊スポーツ出版社